
硝子の園の受胎劇
（マリアージュ）
【記憶を奪われ繰り返す４８回目の初夜♡】
【十数kgに軋む破裂巨腹＆裏返り臍♡】
【白濁のアンブロシア超高圧限界充填♡】
【オルガフロンティア】シリーズ
生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊
本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF
著：XYZ_L

硝子の園の受胎劇
（マリアージュ）



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ

「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

プロローグ：黒い揺り籠 ――効率の果てに生まれた怪物

聖暦2055年。

連合宇宙軍第七生態系研究所――ペルセポネ静止軌道要塞研究ステーション『ヘカテ』。

真空の漆黒を背負う要塞上層、極秘ドックを一望するガラス張りの司令室。

最高司令官リリス・ノヴァリスの冷徹な紫色の双眸は、眼下の専用ドックを静かに見下ろしていた。

ドックの底は、絶対零度の深海のように静まり返っている。

その中央、重厚な油圧拘束架に吊架されているのは、多重に積層された漆黒の外骨格装甲と有機的な生体フレームで構成された異形のオルガマシン。

昆虫の甲殻と脊椎動物の骨格を冒涜的に融合させたかのような、見る者の生理的拒絶を直接刺激する禍々しい威容。

XA-07『ネクサス・プロト Type-H』。

核の火が封じられたこの宇宙において、女性の肉体を触媒とし、生体エネルギーの相転移によってのみ真価を発揮する最凶の怪物。

外部循環ラインと接続され、点検用に半開された装甲スリットの奥からは、過冷却バイオジェルが放つ青白い燐光が漏れ見えている。

ペルセポネで採取される特異生体資源『ルミナ・リリウム』の抽出液を炉心循環ラインへと直結し、搭乗者の神経系を極限まで励起させるための冷酷な設計思想。

その機体を、純白の研究衣をまとった一人の男が、ドックの底から恍惚の表情で見上げていた。

司令室のスピーカーを通して、無機質に増幅された男の声が響く。

「素晴らしい……実に、効率的だ……」

手元のコンソールに展開された監視モニター上で、男が機体から視線を外し、複雑に絡み合う生体ケーブルの隙間を抜けて、はるか頭上の司令室――リリスへと狂信的な眼差しを向けるのが映し出された。

かつての大戦の英雄セレナ・ノヴァリスと寸分違わぬ容姿を持つ、彼女の遺伝的複製体（クローン）へと。

「報告します、司令。Type-Hの基本循環系の初期化はすべて完了しました。これより機外からの遠隔生体データリンク試験、最終シークエンスへと移行可能です」

男の言葉に、リリスは無感情に頷くだけだった。

身体の起伏を一切の無駄なく拾い上げる、タイトに仕立てられた漆黒の司令官制服。

胸元は機能優先で大胆にくり抜かれ、白磁のように豊満な双丘が惜しげもなく冷気に晒されている。

直結プロトコルに備えて下着の着用すら許されず、冷たい生地が直接素肌を包む感触を纏いながらも、乱れのない銀髪を背へと流す彼女の端麗な表情からは、人間的な温かみは一切感じられない。

下腹部の奥――幾度もの過酷な適合試験によって冷徹に調律され尽くした聖杯体（カリクス・ボディ）が微かな生体熱を放つ以外は、まるで精巧に作られた白磁の義体のようだった。

徹底された軍事教育と選民思想が、彼女から非効率な感情というものを根こそぎ削ぎ落としていた。

「かつて我々が運用した『歌姫ユニット』……。

あれはパイロットという不確定な存在を排除し、完全な『生体部品』として肉体を組み込む効率を極限まで高めた一つの完成形でした。

そして『白銀の奈落』で観測された、英雄セレナ・ノヴァリスの戦闘データと、二機のオルガマシンによる共鳴現象……。

あれは人間の魂が叩き出した、奇跡的な『性能』の証明だった」

男はドックの底で、生体データの神聖さに酔いしれるように両手を広げた。

「我々はその二つのあまりにも貴重なデータから結論を導き出したのです。

究極の『効率』と、究極の『性能』を両立させる唯一の方法を。

母胎が子を育むように機体がパイロットを内包し、その生命エネルギーのすべてを、一滴残らず吸い尽くす。

これぞ、我々が到達した究極の『揺り籠』です」

スピーカーから漏れる狂信的な言葉を聞きながらも、リリスの紫の瞳はただ眼前の黒い怪物を映していた。

（……『母胎』、か）



彼女の脳裏に、かつて地下プラント『エデン・コア』で見届けた実の妹イリスの姿がよぎる。

終わることのない極限の受胎と搾取の地獄。

その中で、それでも狂気的な幸福に縋って喘いでいた妹の、無惨に膨れ上がった巨腹。

泥にまみれて産むのは、あの子の役目。

血にまみれて殺すのは、私の役目。

やがて来るべき日に、あの漆黒の機体は己の肉体を陵辱し、魂さえも喰らうだろう。

同じ顔を持つ妹が『肉の揺り籠』として使い潰されているように、自分もまた、あの『鉄の揺り籠』の生きた部品として消費される。

だが、彼女に恐怖はない。

それは、世界統合連合が定めた最も効率的な未来なのだから。

（私は、あの子のような弄ばれる家畜ではない）

リリスは静かに自嘲した。

誰かに支配される器として生み出された覚えはない。

自らの意志で肉体を差し出し、兵器そのものを統御し、世界を切り裂く側に立つ存在なのだから。

白銀の夜明けの空を舞う、一筋の光――その光を喰らうために。

深淵の底で、黒い怪物が静かにその胎動の時を待っていた。

あの日――あの大地深く閉じ込められた硝子の園で、自分は何を見届け、何を切り捨てたのか。

冷え切ったガラス越しの記憶が、リリスの意識の底から鮮烈に蘇っていく。

眼下に広がるドックの闇が、1年前の地下温室を満たしていた白く眩い人工太陽光へと反転していった。

第1章:硝子の温室 ――14時00分のまどろみ

漆黒の宇宙ドックを満たしていた絶対零度の闇が、一瞬にして鮮烈に反転する。

視界を焼き尽くすように広がったのは、地下深くの人工温室に降り注ぐ、白く冷たい人工太陽光の光条だった。

聖暦2054年。

北米要塞地下700m。

外界の戦火と汚染から完全に隔絶された極秘生体プラント『エデン・コア』第7階層は、重厚な密閉隔壁に囲われた鳥籠だった。

大干渉によって核の火を失った人類が、地熱と下層の生体発電ユニットから吸い上げた電力で維持する人工生態系。

青々とした人工植生と純白の調度品でどれほど穏やかな温室を装おうとも、密閉空間を支配する空気はその欺瞞を冷酷に暴き立てていた。

超大型空調ダクトが吐き出す低周波のうなり。

子宮内感染を絶対的に遮断するための、高濃度オゾン殺菌特有の硬質な刺激臭。

そして極限まで引き伸ばされた母体の腹壁を乾燥亀裂から保護すべく、加湿ノズルから濃密に噴霧される微細ミストが、熱帯のような重たい湿気となって肌へまとわりつく。

穏やかな休息を装う調度品とは裏腹に、肌を包む気流は冷酷な事実を告げていた。

過酷な生体炉心を安全に保全するためだけに調律された、無機質な培養室の空気。

世界統合連合の厳格な軍事タイムテーブルにおいて、この場に許された休息枠はわずか30分。

14時00分から14時30分までの、かりそめの幕間に過ぎない。

純白のアイアンテーブルを挟み、二人の少女が向かい合っていた。

一人は、仕立ての良い漆黒の士官制服に身を包んだClass-A、リリス・ノヴァリス中尉。

後に宇宙要塞ヘカテで生体直結用の露出制服を纏うことになる前の、冷徹な軍事規律そのものを体現していた姿だった。



襟元やボタンを一分の隙もなく上まで留め、冷たく糊の効いた軍服。

背中深くまで豊かに流れる美しい銀髪は、一筋の乱れもなく滑らかに整えられ、冷徹な紫色の双眸には他者を容赦なく観察する氷の光が宿っている。

だが極薄の強化繊維で仕立てられたタイトなカッティングは、身体の起伏を一切の無駄なく拾い上げ、豊かな胸の張りやくびれた腰のラインを露わにしている。

下着のラインが存在しない生地が直接素肌に密着しているその佇まいには、統制官としての威厳と倒錯した官能性が同居していた。

もう一人は、薄手の純白ワンピース一枚を身にまとったClass-S、イリス・ノヴァリス。

同じ遺伝子から鋳造された、寸分違わぬ端麗な輪郭と、背を覆う豊かで美しい銀髪。

だが、その白銀の長い髪は下腹部から立ち上る生体熱と微汗によって、華奢な首筋や豊かな胸元に湿り気を帯びて乱れ張りついていた。

二人の肉体に刻まれた機能は、世界の天と地ほどに決定的な断絶を晒していた。

「……ふぅ、んっ……」

医療用低反発ゲルクッションに身を沈めたイリスが、浅い吐息を漏らしながら身じろぎした。

華奢な鎖骨や折れそうな四肢からは到底信じがたい質量が、彼女の下腹部に凝縮されている。

常人の臨月を遥かに凌駕し、水分を極限まで湛えた大玉スイカを思わせる球体まで異常肥大した巨腹。

胎児をわずか数週間で成熟させるための超高濃度液体栄養素であり、同時にその異常な細胞分裂熱と生体パルスを吸い上げる冷却液でもある高純度強化羊水。

強化羊水だけで10kgを超え、急速成長する胎児を含めれば10数kgに達する過剰な液塊は、彼女から重心を完全に奪い去り、骨盤と腰椎を軋らせる過酷な重力負荷となっていた。

極限まで引き伸ばされた腹壁の皮膚は、触れれば弾けそうなほどのテンションで張り詰め、温室の光を鏡のように反射している。

青い毛細血管が網目のように浮き彫りになり、その下には過去47回に及ぶ急速受胎の痕跡である、銀色の妊娠線が無数の裂け目となって刻まれていた。

半透明化した皮膚の隙間から、胎児を包む強化羊水の青白い燐光が、呼吸に合わせて脈動するように淡く透けて見えている。

胎児の熱を吸い上げた腹膜は微熱を帯び、薄い布越しにも立ち上る生体熱が、滲み出る母乳の甘い匂いと共に生暖かく空気を澱ませていた。

イリスは深遠な紫（アメジスト）の瞳を細め、慈しむようにその異形の下腹部を両手で撫でさすった。

「どうしたの、イリス。苦しい？」

リリスは手元の磁器カップを傾け、冷めかけたアールグレイの湯気越しに妹を見据えた。

声からは一切の感情を削ぎ落とし、冷徹な管理官としての平坦さを保つ。

「いいえ、お姉様。……この子が、お腹の中で元気に跳ねているだけよ」

イリスは純真な笑みを浮かべ、胸元で細い指を組んだ。

「ねえ、リリスお姉様」

「……なに」

「この子が産まれたら……三人で、ピクニックに行けるかしら。お姉様が言っていた、本物の空がある場所へ」

リリスは紅茶を持つ指先を、わずかに止めた。

妹の無垢な笑顔を見つめるリリスの網膜上で、リアルタイムの音声照合データが無機質に点滅する。

『音声パターン照合：第46次、第47次生産フェーズ記録と一致率99.4%』

視界の隅に浮かび上がる冷酷な数字。

また、その話か。

リリスは内心で冷たく息を吐いた。

生体出力を極限まで引き出すため、あえて温存された高度な知性と豊かな感情。

その代償として、日々の追充填を初夜と思い込ませるための局所シナプス切除と、出産を終えるたびに赤子の存在ごと奪い去る完全な記憶消去。

産み落とした赤子がどこへ運ばれ、いかなる兵器の炉心へと解体されたのかも知らぬまま、彼女は40余りの命を吐き出し続けた中古の揺り籠に過ぎない。

リリスは表情筋をミリ単位も動かさず、習慣化された通りの嘘を口唇に乗せた。

「……ええ。きっと行けるわ。だから今は、しっかり食べて、そのお腹を育てなさい」

「ふふ、嬉しい……。私、頑張るわ。今度こそ、立派なママにならなきゃ」

ボコォッ……！

鈍く湿った重い衝撃が、静かな温室の空気をわずかに震わせた。

極限まで引き伸ばされた腹壁が、内側から鋭く突き出された小さな踵によって、テントを張るように鋭角に押し上げられる。

子宮を満たす強化羊水を割り、胎児が放った強烈な蹴撃。

陶器のように張り詰めた皮膚が引き絞られ、ミシッと微小な繊維の軋む気配が走る。

「っ、あ……！」

横隔膜と胃袋を容赦なく真下から突き上げられ、華奢な上半身がガクリと前傾した。

衝撃を吸収した医療用ゲルクッションが、くぐもった沈み込みの音を立てる。

「……うふふ、この子ったら。……もうすぐパパが初めて会いに来てくれるって、ちゃんと分かってるのね」



内臓を圧迫された痛覚に脂汗を浮かべながらも、イリスはどこか諦念の混じった、熟れきった雌の笑みを浮かべてみせた。

記憶を遮断されてなお、機械による度重なる激しい種付けの記憶が、肉体の細胞レベルで刻み込まれている。

その時だった。

ピピピッ、ピピピッ――。

無機質で硬質な電子同期シグナルが、温室の空調ダクトを震わせた。

14時30分。

規定された幕間の終わりを告げる合図。

同時に、天井の人工太陽光が一斉に明度を落とした。

代わりに壁面のスリットから、粘つくような毒々しいピンク色の演出用低照度ライトが照射される。

清らかな温室は一瞬にして、淫靡で背徳的な生体実験室へとその相貌を反転させた。

「……時間よ。充填工程（ワーク）へ移行するわ」

リリスはカップをソーサーに戻し、音もなく立ち上がった。

声からは微かな温度すら消え失せ、冷徹な統制官の貌（かお）へと戻る。

イリスもまた、夢見る少女の表情を脱ぎ捨てた。

テーブルの天板に両手をついて体重を預け、ゲルクッションの沈み込みから腰を浮かせる。

両腕で異様な下腹部を抱え込み、前方に引っ張られる過剰な質量と重心の揺らぎを、強靱に再設計されたバイオ筋肉で強引に支え切った。

その無駄のない起立動作には、痛ましいほどの手慣れ感があった。

彼女は薄暗いピンク色の光に染まりながら、温室の最奥へと視線を向ける。

「行きましょう。……『旦那様』がお待ちよ」

第2章:ヴィーナスの受胎台 ――48回目の初夜

温室の最奥を遮断していた強化アクリル防弾隔壁が、重厚な空気圧音を響かせて左右へとスライドした。

現れたのは、毒々しいピンク色の演出光に沈む特別管理区画『ヴィーナス・チェンバー』。

その中心に鎮座するのは、太い油圧配管と生体データケーブルが幾重にも這い回る天蓋付きの医療寝台――『ヴィーナスの受胎台（ヴィーナス・アルター）』である。

リリスは観察用メインコンソールの前へと歩みを進めた。

軍務用端末をドッキングスロットへ滑り込ませると、半透明のホログラムスクリーンが冷徹な緑色の光脈を散らし、受胎台の全センサーと同期する。

イリスは誰に命じられることもなく、受胎台の足元へと歩み寄った。

細い指先を首元へ掛け、纏っていた純白のワンピースを躊躇なく滑り落とす。

布擦れの微かな音と共に、床へと零れ落ちる薄布。

露わになった全裸の肢体をガラス越しに見下ろした瞬間、リリスの胸に言い知れぬ薄気味悪さが湧き上がった。

奇怪な、あまりにも歪な光景だった。

イリスの表情には、これから愛する夫に初めて身を捧げる乙女のような、無垢で純真な羞恥の笑みが浮かんでいる。

しかし、その細い首から下に広がっているのは、とうに処女性など微塵も残されていない、世界統合連合が創り出した最高級の生体資産（Class-S）――使い潰された繁殖母体（マトリクス）の肉塊だった。

「……ん、っ……」

イリスは両手で巨大な腹を慎重に抱え上げ、受胎台の冷却ゲルマットの上へと身を預けた。

彼女の体重が乗った瞬間、台の背もたれが自動で25度ほど起き上がり、緩やかな傾斜――半坐位（セミファーラー）を形成する。

高純度強化羊水だけでも10kgを超え、異常発育した胎児を含めれば10数kgに達する過剰な質量。

それが下大静脈を押し潰し、急性血圧低下や呼吸停止を引き起こすのを防ぐための冷酷な生命維持機構だった。

意識を清明に保たせ、最後の瞬間まで苦痛と快楽を自覚させるための工学的配慮でもある。

受胎台のゲルマットに沈み、内臓を真下から押し潰されたイリスの喉から浅い苦悶の吐息が漏れる。

その湿った呼気すら、受胎台の集音センサーが余さず拾い上げ、観察コンソールのスピーカーを通してリリスの耳元へ克明に届けられた。

メロンのように肥大化した乳房は、重力に引かれて左右へと垂れ下がっている。

過剰な受胎ホルモンの分泌により、限界まで勃起した赤黒い乳頭の先端からは、条件反射のように甘い母乳が白い雫となって滲み出し、せり上がった巨腹の頂部へと滴り落ちていた。

そして、視界を圧倒する異様な巨腹。

水分を極限まで湛えた大玉スイカを思わせる球体は、重力に引かれて前方へとせり出し、投げ出された華奢な太ももを押し潰すほどの質量を誇っている。

その薄く透けた皮膚の下では、胎児と10kgを超える強化羊水がパンパンに張り詰め、呼吸に合わせて青白い光脈を脈動させていた。

すでに過去47回の生産フェーズで命を吐き出し尽くし、今まさに第48次の胎児を孕んで破裂寸前になっている腹。

それでありながら、彼女の意識は今から迎える機械のシリンダーを、純潔の乙女として愛する夫に初めて捧げる「初夜」として信じ切っている。

すでに胎児を宿したこの巨腹で、処女として初夜を迎えるという狂気的な論理矛盾。

知性も豊かな語彙も、何ひとつ奪われてはいない。

ただ、目前の異常を疑うための論理回路だけが、連合の施した薬物と調教によって都合よく迂回させられていた。

「神聖な奇跡によって身籠もった我が子を、今夜初めて夫に認知してもらい、真の契りを結ぶ」――そう刷り込まれた倒錯の脚本を、彼女は春の木漏れ日のように穏やかに、あまりにも自然に受け入れてしまっている。

両脚の付け根を見れば、繰り返された機械拡張によって完全に閉じきることのない秘裂が、微かに口を開けている。

充血した赤い粘膜からは、室内に立ち上る生温かいフェロモン臭と共に、糸を引くほどの粘度を帯びた透明な愛液がとめどなく溢れ出していた。

（……気味が悪い）

ガラス越しに見下ろすリリスの背筋を、冷たい泥でなぞられるような悪寒が駆け抜けた。

リリスの網膜の奥底で、48サイクル前の残像が鮮烈に明滅する。

最初の1回――本物の初夜の記憶。

当時、まだ何の拡張も受けていなかったイリスの下腹部は、平坦で無傷だった。

冷酷な機械機構に両脚を押し開かれ、処女の肉を無慈悲に押し割られた瞬間、彼女は狂乱して泣き叫んだのだ。

「お姉様、助けて……っ！」

喉を裂かんばかりの悲鳴と共に、鋼鉄の拘束具に縫い止められた華奢な肢体が激痛で跳ね上がる。

「痛い、いやぁっ！ 身体が、壊れちゃう……っ！」

血と涙を撒き散らし、イリスは首を振り乱しながら、立会人として傍らに立っていたリリスへ絶望的な眼差しで縋り付いた。

処女性を無惨に奪われる恐怖に狂い、ただ一人血の繋がった姉へ、声の限り救いを乞うていたあの日の姿。

だが、現在のイリスはどうだ。

カチャリ、と自動拘束アームが作動し、鋼鉄製クランプが両足首と膝裏を固定して屈辱的なM字開脚に押し開いても、彼女の双眸に怯えの色は微塵も浮かばない。

逃げ場のない角度で寝台フレームへ完全ロックされ、天井のセンサー群へ晒された股間。

天井のスピーカーから無機質なアナウンスが降る。

『被検体Class-S、固定シークエンス開始。衝撃対抗措置、骨盤固定プロトコルへ移行します』

「ん……くぅ……っ」

イリスは抵抗するどころか、迎え入れるように小さく腰を浮かせた。

彼女の肉体は、次に何が体内の奥深くへ侵入してくるのかを、条件反射の領域で熟知しきっている。

寝台の中央、臀部のスリットから、低周波のモーター音と共に鈍い銀光を放つ円錐プラグがせり上がってきた。

『姿勢制御用アナル・アンカー』。

ヌプッ、グチチッ……ズボォッ！

「ひグッ！？ ……ぁ、ぅぅ……っ、入っ……たぁ……」

潤滑ジェルを塗布された金属塊が、最も恥ずべき窄まりを押し割り、呆気なく根元まで飲み込まれていく。

かつてあれほど泣き喚いて拒絶した異物を、引き伸ばされ慣らされた肉壁が、貪るように最奥へと導いてしまう。

ガシュンッ！

鈍い衝撃音と共に、リリスの手元にあるコンソールのホログラム画面に、イリスの立体骨盤透過モデルが表示された。

直腸深奥でアンカー先端の平滑なチタン製支持リブが四方へと静かに展開し、粘膜を傷つけることなく均等な面圧で仙骨と骨盤フレームを内側から突っ張るグラフィックが映し出される。

拘束ステータスが赤から完全固定を示す緑へと反転した。

同時に、コンソールのサーモグラフィ上で、過熱する骨盤腔からアンカーの排熱アース配管へと熱量が急速にバイパスされていく青い熱流が表示される。

腸壁からの高濃度栄養ジェルの圧送ゲージも、即座にスタンバイ状態へ移行した。

破壊される恐怖など、そこにはもう存在しない。

ただ日常の重い圧迫感として異物を受け入れ、イリスは潤んだ瞳に涙を溜めながら、恍惚とした笑みで観察窓のリリスへ視線を向けた。

「固定完了……しました……♥」

コンソールの生体テレメトリー上で、アナルを塞がれたことによる受容体パルス波形が跳ね上がり、前方の膣腔へと集中していく。

ガラスの向こうでは、イリスの秘裂からさらに大量の愛液が溢れ出し、シートを濡らしていた。

頭上の天井ハッチがスライドした。

油圧シリンダーの鈍い駆動音と共に、極太の機械腕が鎌首をもたげる。

『自動授精ピストン』。

クロムメッキされた極太のシリンダー。

その照準軸の延長線上に、イリスの子宮頸部深奥にある発電炉心――『聖杯体（カリクス・ボディ）』の座標がロックオンされる。

機械腕が静かに降下し、冷たいシリンダーの先端が、だらしなく濡れそぼるイリスの秘裂へと寸分の狂いもなく押し当てられた。

「っ……、ひ……」

氷のように硬く冷徹な金属の感触に、熱く充血した粘膜が反射的に粟立ち、キュッと強張るのがガラス越しにも見て取れた。

愛する夫に身を捧げていると信じ込んでいるはずの表情の裏で、細い指先が無意識に寝台のマットへ爪が白くなるほど食い込み、全身の筋肉が身を守るように硬直しかける。

その微細な筋硬直と拒絶パルスを、コンソールの生体センサーが見逃すはずもなかった。

リリスのコンソールに、甲高いアラートと共に赤い警告ウィンドウが点滅する。

『母性共鳴スクリプト：肯定コード入力待機』

『※警告：被検体の拒絶・無感情を検知した場合、胎児の羊水嚢へ0.8kVの高周波パルス通電を実行（※胎児心拍閾値維持モード。閾値割れ直前で遮断）』

スピーカーから響く無機質な電子警告音。

リリスは手元の通信スイッチを入れ、冷徹に言い放った。

「Class-S、スクリプトを開始しなさい。……お腹の子を殺したくなければね」

「ぁ……っ！」

スピーカー越しに、押し殺した短い悲鳴が返ってきた。

コンソールの心拍モニターが跳ね上がる。

ガラスの向こうでイリスの顔が蒼白になり、喉元を激しく上下させて出かかった本能の悲鳴を必死に嚥下するのが見えた。

引き攣る頬に自らの指先を食い込ませるようにして、無理やり口唇を三日月型に歪め、健気な妻の笑みを取り繕おうともがいている。

「おかえりなさい……あなた」

巨大な腹を抱え、身体の奥深くまでボルト止めされた少女が、震える唇で48回目の初夜の言葉を紡ぎ出す。

「愛して……いるわ……っ」

ピピピッ――。

『肯定コード確認。母性共鳴率規定値クリア――挿入シークエンスへ移行』

ズチュッ、ズポォォオオオッ！！

容赦のない油圧のストロークが、彼女の柔らかな肉の襞を無慈悲に押し分けた。

シリンダーがストローク限界のゼロ点まで一気に沈み込む。

激突の衝撃で受胎台ごとイリスの腰が軋んで跳ね上がり、コンソールの打撃荷重センサーが、子宮口の聖杯体を直撃したことを示す規定ピーク値を叩き出した。

ヴィーナスの受胎台(ヴィーナス・アルター)



極秘生体プラント『エデン・コア』第7階層『ヴィーナス・チェンバー』に設置された、戦略繁殖母体（Class-S）専用の生体管理・エネルギー回生複合プラットフォーム。

次世代生体炉心の培養と、受胎プロセスに伴い発生する相転移エネルギーの回収を主目的とする。

過剰な質量負荷から母体の下大静脈圧迫を防ぐ自動傾斜システムを備え、背位側からは骨盤固定・排熱バイパス・高濃度栄養ジェルの圧送を担う『姿勢制御用アナル・アンカー』を接続、天面からは母体深奥の発電炉心（聖杯体）を直接励起し高密度生体エマルジョンを高圧充填する『自動授精ピストン』が連動する。

励起および胎児炉心との二重共鳴によって生じる戦略規模の相転移パルスは、機構外周に敷設された『エネルギー回生グリッド』を通じて地下超伝導蓄電バンクへ強制バイパス送電され、母体の生命維持・物資補給・高負荷発電・受胎管理の全工程を単一サイクルで完結させる基幹インフラとして機能する。

作品名：硝子の園の受胎劇（マリアージュ）

発行日：2026年10月11日

発行者：XYZ_L

連絡先：https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
